

作品ID	書名	内容	所有	出版社
59 (1)		体がすぐれないのを理由に定廻役を離れる気ままな勤めぶりゆえに“ゆっくり雨太郎”と呼ばれる町方同心・若月雨太郎。道すがら、男にいきなり匕首をふるわれた。なんなくねじ伏せて理由を質してみると、十年前に雨太郎に捕えられ八丈に島流し、そのため言い交わした女は自殺、病身の妹も死ぬのを待つばかりという。さて、どうする、ゆっくりの旦那? (「ふさぎの虫」)江戸の人情と情緒が		徳間文庫
60 (2)		亀戸で野犬が次々に人を咬み殺した。天満宮の下男、能楽師、武家の女房……。殺された女房は旗本の奥方で離縁中という。物見遊山で亀戸までできていた雨太郎は持前の鋭い勘で、事故の裏に仕組まれた“事件”を嗅ぎとるのだった(「犬を飼う侍」)。“ゆっくり”の異名を持つ八丁堀同心・若月雨太郎と情人りの仮住居に、今日も怪事件・難事件が飛び込んでくる。江戸情緒ゆたかな異色捕		徳間文庫
61 (3)		由緒ありげな住まいで、お妙様とも春香院様とも呼ばれる由緒ありげな女が殺された。これまた由緒ありげにも、現場には小倉百人一首の読み札が落ちているだけで、目星は皆目つかない。怪事件、難事件となると、普段は腰の重い“ゆっくりの旦那”こと八丁堀同心・若月雨太郎の探索心にも火がついて……(「しかぞ住む」)。江戸の市井を舞台に男と女が生み出す事件の数々を人情味豊かに		徳間文庫
62 (4)		保の江戸市中。因業金貸しの松兵衛が息を引きとった。いまわの際に家人一同を呼び集めていわく、「大事な宝を屋敷に隠してある。見つけたやつにその宝をやるが、代りに子供の面倒を見る」。さあ大変。松兵衛の妾お政、下男儀平、甥の治郎七らは宝さがしに目の色かえて狂奔。騒ぎが騒ぎを呼ぶが、“ゆっくり”と異名をとる八丁堀同心若月雨太郎、冴える推理で見事解決。傑作捕		徳間文庫

63 (5)		<p>大工の棟梁・磯七が料理茶屋で殺された。虫の息の磯七いわく、茶屋の博打に加わったおりんという女と知り合ったという。おりんは負けの込んだ磯七に金を貸し与え、しかも博打の後、一夜を共にした。翌朝、頭に激痛を覚えて目をさました磯七の隣に、背中に見事な彫物をしたおりんがいたというのだ。おりんの身許はすぐに割れたが、なぜか背中に彫物はなかった。異色捕物控</p>		徳間文庫
64 (6)		<p>いきなり後ろから袖をひっぱられ、脂粉の匂いを漂わせた、ちょいといい女に「市助さん、お前の女房のお春ですよ」と人違いされた八丁堀同心・若月雨太郎。雨太郎は途方にくれつつも山城屋という茶問屋の市助になります。市助が戻ってきた祝いの夜も更けて、いよいよお春と水入らずになったことから事件が勃発する... ...('忘れた昔')。下町の風物と人情を背景に繰り広げる</p>		徳間文庫